

地方都市における若者参画のまちづくりの提案 —宇都宮市を事例に(その2)—

事業代表者 (宇都宮大学教育学部家政教育専攻・教授・陣内雄次)

構成員 (宇都宮大学大学院教育学研究科教科教育専攻家政教育専修・2年・大嶋悠也)

1. 事業の目的・意義

わが国は超高齢化、人口減少という他諸国が経験したことがない縮退社会になり、持続可能な地域社会を形成していくために、今まで以上に地域資源に着目したまちづくりが必要とされている。特に、今後の地域を担っていく若者のまちづくりへの動機付け、参画が喫緊の課題となっている。平成23年度事業で、宇都宮市大谷地区を事例に中学生のまちづくり学習に関する提案を実施した。今回はその継続という位置づけであり、宇都宮市をフィールドに若者(主に高校生)が、まちづくりに能動的に参画していくための方法論を調査研究に基づき提案することを目的とする。加えて、先進事例である石巻市(石巻高校生カフェ「」(かぎかっこ)の調査報告も行う。

2. 研究方法

(1) 北関東3県の自治体へのアンケート調査

高校生が参画したまちづくり事業の現状と課題を把握することを目的に、2014年8月下旬から9月中旬にかけて栃木県、茨城県、群馬県の104市町村にアンケート調査を行った。

【アンケート調査概要】

〔目的〕

北関東3県の自治体における高校生の地域参画促進を目的とした取り組みと、高校生活用の今後の可能性について把握するため

〔対象〕

栃木県・茨城県・群馬県の市町村

〔実施時期〕

2014年8月下旬～9月中旬

〔配布数と配布回収方法と回収率〕

配布数 104自治体

回収数 77自治体(回収率 74%)

* 郵送による配布回収

【アンケートの結果】

1) 高校生のまちづくり参画の現状

高校生のまちづくり参画の状況は、現在高校生を活用している自治体が64%、将来的に高校生を活用したいという回答が82%であった。

過去5年以内に多くの高校生連携事業が始まっており、活動内容は主に教育・文化活動であることが分かった。

2) 今後高校生に地方自治体が期待すること
地域や行政への関心度の向上であった。この期待の裏側には高校生の「地域や行政への関心度が低い」という課題が存在することが読み取れる。若者の視点・センスを活かした情報発信も期待されていた。

3) 高校生を活用する上での課題

「活動の日程が調整しにくい」、「継続的な参加が期待できない」、「地域や行政への関心度が低い」の回答が多かった。

(2) 高校生のまちづくり参画の可能性

以上の結果から、高校生のまちづくり参画の可能性についてまとめる。

1) 発達段階における高校生という時期

発達段階における高校生は、他者とのかかわりや環境の変化などから自己を見つめ直す時期であるとされている。高校生は、自己を見つめ直す中で、互いに価値観や人生観などを語り合う深い関係が進むとされているが、現代においてその深い友人関係を構築することに心理的な恐れを抱き、表面的な付き合いになっていることなどが課題としてあげられる。

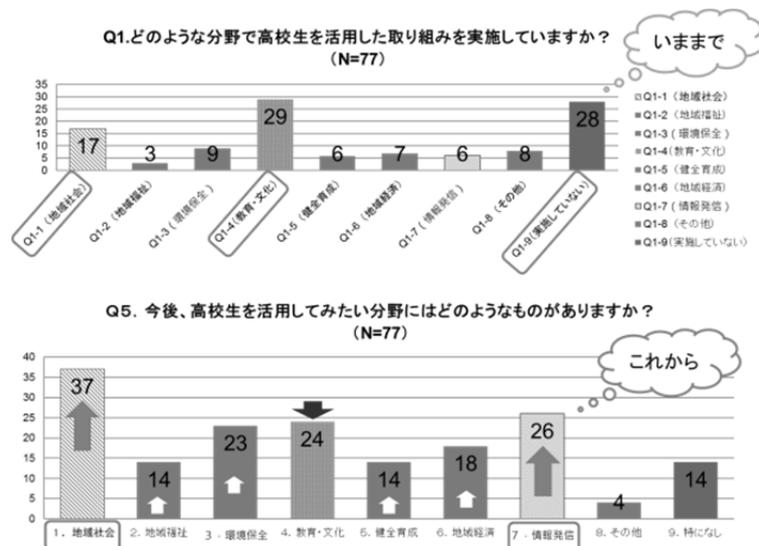


図1. 高校生のまちづくり参画の現状と期待

2) 地域からみた高校生

地域にとって高校生の活動が必要なものとなっている。地域にはさまざまな問題が起こっている。これらの問題を解決し、住みよい地域にしていくためには、財政上の問題もあるが、いまや行政のみでは難しく、地域住民の参画・パワーが必要。なかでも祭りの神輿の担い手、街路樹の美化、災害時の避難やガレキの後の片づけなどは、若者の力にたよらざるをえない。彼らがいなければ、地域社会の存続維持すら難しいところも多く、地域が高校生に期待し、彼らの活動を期待している。

3) 高校生のまちづくり参画の可能性

1) 2) から、高校生のまちづくり参画には、高校生の“自己形成”の場としての価値と、地域の人材としての価値の二つが見いだせる。なぜなら、高校生がまちづくりに参画することにより、地域の活性化に寄与するだけでなく、高校生自身が多様な大人や友人との深い関わりの中で、自己形成をすることが可能であると考えられるからである。

しかし、アンケート調査より、高校生のまちへの関心度の低さや継続的な参加が期待できないことが課題として挙げられたので、高校生のまちづくり参画における大人の働きかけやプログラムを検証することで、その課題解決に繋がるのではないかと考えた。

(2) 石巻市の高校生カフェ「 」(かぎかっこ)

1) 高校生カフェ「 」(かぎかっこ)の概要
高校生がつくる石巻市の高校生カフェ「 」は、かぎかっこ PROJECT の一環である。かぎかっこ PROJECT では、社会に一步踏み出している彼らに対し、地域とのつながりを持つ機会や、生きがい・働きがいを考える機会、そしてこれから生きる上で対面する様々な課題に取り組む力を身につける機会を生み出している。そして、各プロジェクトでは高校生主体を第一にし、地元の人々との協働体制や、継続の仕組みづくりをおこない、「世界一高校生が輝くまち、石巻」を目指している。

2) 調査概要

【調査目的】

3.11以降、東北各地で高校生のまちづくり参加が見られるようになってきている。震災から3年が過ぎた現在において、その経過と実態について調査するため。

【調査手法】

・聞き取り調査

【調査対象】

・いしのまきカフェ「 」

プロジェクトスタッフ計2名

【調査日程】

2014年12月24日

・スケジュール

時間	内容
6:31-7:34	那須塩原-仙台（新幹線）
8:17-9:35	仙台-石巻（高速バス）
10:00-15:10	①石巻高校生カフェ「 」(かぎかっこ)
15:10-16:40	石巻-仙台（高速バス）
16:50-	自由行動



(写真1. 2014年12月24日 筆者撮影)

3) 調査結果

①高校生の募集について

震災直後にはじまったこの PROJECT は、各高校に募集チラシを配布し、高校生を集めて事業がスタートした。チラシを配布しただけで、30~40人の高校生があつまり、震災後の高校生の意識の高さが活動につながったという。一方で、現状について何うと、現在の高校生の構成は10人程度で、ほとんどが女の子だという。高校生の卒業と共にどんどんと人数が減っていく中、新規の高校生の参加が少なく苦労しているようだ。

②大人の役割について

高校生と一緒にまちづくり活動を実施していく上で、気をつけていることは、「ファシリテーションスキル」と「意見を言いやすい環境づくり」ということであった。なぜならば、高校生のニーズが分からないことには活動が出来ないからということである。しかし、意識力の低い子や発信力の弱い子も見られ、ニーズを引き出すことに苦労したという。ニーズを引き出す際

に気をつけたことは、直接会って話す事だという。難しい点は直接会って話せる時間を確保することであり、高校生の忙しさと大人の人数にたいしての高校生の数などを問題に挙げていた。

③効果的な PROJECT について

“かえるキャンプ”という2泊3日のブートキャンプ形式で、高校生と街の課題発見ワークショップを実施したことは、高校生の組織力や成長を促す上で効果的であったという。ブートキャンプでは、「 」スタッフ複数名に加えて、町役場職員や、地元の漁師、情報館の職員、メディア協力など多くの人との交流もあり、高校生は大きな刺激を受けた。

④大人側の課題

自主財源の確保や新たな資金獲得が課題だという。これはどの地域やNPOでもみられる課題であり、この課題をクリアしていくことが出来なければ、せっかくの事業も水の泡になってしまうと危惧していた。また、PDCAサイクルをもっと大切にすべきであったという指摘があった。どうしてもPDだけで終わってしまうことが多く、高校生達にとって何が成功で何がダメだったのか、振り返りの時間を取れなかったことが課題であった。

4) まとめ

石巻市の高校生カフェ「 」は、石巻駅の直近に立地する石巻市役所の建物の1階にある。「 」は高校生が店舗のデザインや商品開発などを行いながら運営しており、大人顔負けのセンスを発揮し、お洒落かつ商品の品質も良かった。

店員としてOBである卒業生が働いていたのだが、元気で快活なその姿は好印象であった。来年度の部員として期待される中学3年生がたまたま研修にきており、OBにいろいろと教えてもらいながら、勉強している様子もみてとれた。

プロジェクトを運営している大人スタッフへ

の聞き取り調査の結果、高校生のまちづくり参画に求めることとして地域人材の育成という要素が強いことがわかった。教育的な視点というよりも、復興支援をベースとした高校生の参画であり、地域活性に向けた事業内容を高校生に考えてもらうという手法においては、筆者らが関わった栃木市の事例（栃木市若者の居場所づくり事業）と類似していると言える。しかし、支援体制においては栃木市のほうが安定していると考えられる。なぜなら、首長が若者参画を推進している栃木市においては、市の事業として高校生事業を推進していくことが可能であり、資金面などにおいても安定した供給が期待されるからである。一方、国の一時的な助成金から始まったこの「 」プロジェクトは、現時点で、自主財源の確保という困難に直面している。高校生に財源確保まで求める（つまり店舗として利益をだす）のは、ハードルが高いと言えよう。まちづくりには時間がかかるし、高校生の参画には大人の支援が不可欠である。大人の支援を続けていくには、ボランティアとしての大人のサポートを期待するか、公の事業として続けていく選択が必要となる。

3. 事業の進展状況

以上の結果を受け、2015年3月1日に「高校生まちづくり交流報告会」（会場：宇都宮大学Uプラザ）を開催した。アンケート調査、聞き取り調査で明らかになった視点を、まちづくりに関わっている高校生と大人スタッフ（鹿沼市、栃木市、石巻市）と共有するとともに、宇都宮市での若者のまちづくりのあり方を検討することが目的であった。その結果、初動期～発展期にかけての大人のサポート体制を宇都宮市でいかに構築していくのか、ということが重要であることが再確認された。また、学校教育との良好な協働関係の構築が大切であることも指摘された。

4. 事業の成果と今後の展望

高校生のまちづくり参画を促進するためには、学校教育との連携が不可欠である。高校生は高校に依拠した生活を過ごしているため、最も基本的なことは学校教育と地域での学びの連携であり、教科に関連づけて密接な連携を図っていくことが望ましいと考える。例えば、新学習指導要領（2009年改訂）の高校「家庭」の目標には、高校生が「主体的に家庭と地域の生活を創造する能力と実践的な態度」を身につけることが掲げられている。ここで重要だと思われるのは、宇都宮の高校生に家庭や地域の一員としての認識を持たせることだけでなく、家庭や地域の生活のつながりを理解したうえで、主体的に地域に参画していく実践的な態度が期待されていることである。宇都宮の多くの高校生が地域に参画し、学校教育での学びと自己形成を獲得していく。また、その過程で宇都宮の活性化や地域の担い手の育成が行われれば、結果的に宇都宮における若者（この場合は特に高校生）参画のまちづくりが進むことになる。

また、筆者らは、大学生が集落活性化事業に参画している南会津町での聞き取り調査も実施した。その結果、高校生→大学生へと成長する過程で、まちづくりにおけるハードルを少しずつ上げていくことの重要性が明らかになった。したがって、多くの高校と大学が立地する宇都宮市における若者参画によるまちづくりを進めるため、高校～大学の連携を構築していくことを提案する。宇都宮市は「大学生によるまちづくり提案事業」を進めているが、これを「高校生・大学生によるまちづくり提案」にしてはどうか。高校生と大学生が混合したチームをつくり、その混合チームごとに提案するのである。また、優秀チームには、その提案が宇都宮市内でリアルに実施されるよう、「人のサポート」（提案内容に関する専門家をアドバイザーとして配置）、「金のサポート」（提案内容を進めるための予算の裏付け）を設けることも提案する。

今回の事業で強く認識されたことは、高校生、大学生の「潜在力の高さ」である。宇都宮の高校生、大学生が、各地で活躍できるきっかけや場面を豊かに創造していくことは大人の責任でもある。